The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪大学におけるアカデミック・ライティング教育の実践と教材作成
Author(s)	堀, 一成; 坂尻, 彰宏
Citation	大阪大学高等教育研究. 2015, 3, p. 27-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51489
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学高等教育研究　3（2014），27−32

【教育実践レポート】

大阪大学における
アカデミック・ライティング教育の実践と教材作成

堀　一成・坂尻　彰宏

Academic Writing Education at Osaka University: Instructions and Development of Materials for Students and Teachers

Kazunari HORI and Akihiro SAKAJIRI

This paper reports recent characteristic approaches in the academic writing education that the authors are carrying out at Osaka University. Academic writing education has been provided at Osaka University, but due to the limited number of classes and instructors, not enough students were able to take those classes. After researching writing education at other universities, the authors attempted some adjustments in April, 2014, to create more opportunities for many students - especially first-year students - to learn academic writing. The authors published a new booklet, its corresponding teachers' manual, and carried out faculty development programs, so that other faculty members can also teach academic writing in their own classes even if they are not in charge of academic writing education.

Keywords : Academic Writing, First-Year Education, Teaching Materials, Teacher's Manual, Library, Learning Support, Education Support

1　はじめに

本稿では，報告者らが実践しているアカデミック・ライティング教育の，最近の特徴的な取り組みについて報告する．これまでも大阪大学においてアカデミック・ライティング教育は実施されてきたが，開講できる科目数や担当教員数の制限から，その受講対象学生数は十分ではなかった．平成26年4月以降，特に学部初年次の学生の多くがアカデミック・ライティングについて学ぶ機会が増えるよう，その手段として多数の教員が担当科目中でアカデミック・ライティング教育ができるよう，整備を行った．その整備の内容は，学生向けアカデミック・ライティング指導小冊子の作成と配布，教員向けマニュアルの作成，アカデミック・ライティング指導を科目に取り入れるためのFDプログラムの実施である．

本稿の構成は以下のとおりである．まず第2節では，平成26年4月以前のライティング指導の状況とその時点での問題点について述べる．また参考となる他大学の事例についても述べる．第3節では，その状況を改善するため取り組んだ実践の内容について述べる．特に報告者ら以外の教員にもライティング教育を実践してもらうことを目的とし，作成した小冊子，教員マニュアルについて述べる．第4節はまとめと今後の課題について述べる．

2　大阪大学におけるアカデミック・ライティング指導の状況と問題点

本節では，平成26年4月以前の大阪大学におけるアカデミック・ライティング指導の状況を，報告者らが担当した事項を中心に紹介し，併せてその時点で直面してい

所　属：大阪大学全学教育推進機構　教育学習支援部門
Affiliation : Center for Education in Liberal Arts and Sciences, Osaka University, JAPAN
連絡先：hori@celas.osaka-u.ac.jp（堀　一成）

た問題点について考える.

2.1　報告者らが担当した取り組み

2.1.1　図書館講習会

2010(平成22)年6月以来，報告者(堀)が中心となって，附属図書館のラーニング・コモンズを会場に，学部初年次学生向け日本語アカデミック・ライティングの講習会を定期的に実施している[1)2)].

講習会は自由参加であり，90分の講習3回で構成されている．内容は，パラグラフライティングの紹介・適切な引用と倫理・大学の提出物にふさわしい形式を整えることなどである．各回の受講者数は数名～２０名ほどである．学部初年次生だけでなく，大学院生などの参加もあった.「論文プチゼミナール」と題する高学年次生向けの講習会も実施している.

また，附属図書館職員や図書館TA(博士後期課程の学生)が講師役を担当して実施していることも特徴である．これにより，講習会開催数・開催日時・開催場所の点で拡張が可能になった.

2.1.2　アカデミック・ライティング基礎セミナー

2012(平成24)年4月以来，報告者(坂尻)はアカデミック・ライティングのグループ学習を主内容とする学部初年次生向けの少人数セミナー授業(基礎セミナー)を開講している．各年1期に3科目(うち1科目は集中講義)，2期に1科目開講としている．平均受講者数は20名程度であり，年間100名弱に対する教育ができていることになる.

各科目の内容は統一化しており，

- アカデミック・ライティングがなぜ必要か
- 図書館での情報検索，リーディングのテクニック
- ブレインストーミングやアイデアマップの作成
- 一貫した論理の流れの確保とパラグラフ・ライティング
- プレゼン準備と発表体験
- 作成文章のグループディスカッションを通じた改善作業

などである．ほぼ毎回宿題を課し，提出物に対するフィードバックを行っている.

2.2　その他大阪大学内で取り組まれていたこと

国際教育交流センターの村岡貴子教授は，長年留学生を主な対象として，専門科目で必要となる日本語の教育に従事しており，その成果は教科書や研究書として出版されている[3)4)].

また，グローバルコラボレーションセンターは，学部生と大学院生向けのライティング科目を開設している.

2.3　問題点

上記のように，一定の取り組みがなされてはいた(その取り組みは平成26年度開始以降，本稿執筆時点においても継続している)が，以下のような問題点，あるいは他大学と比較して取り組みが不足している点が存在していた.

- 全学のニーズをカバーするライティングセンターがないこと
- 学部初年次生全員を対象とする，アカデミック・ライティング教育を主内容とする必修スキル教育科目が存在しないこと
- 担当教員数が不足していること
- 教員が自由に使える教材が不足していること

大阪大学には，本報告執筆時点において，全学のニーズをカバーするライティングセンターは開設されていない．全学教育推進機構のガイダンス室や附属図書館ラーニング・コモンズにおいて，TAが学習相談に応じている．その内容中にアカデミック・ライティングも含まれる場合があるが，限定的であり利用者数も限られている．このため，アカデミック・ライティング科目を受講せず，さらに教員の科目内での指導や，図書館イベント参加の機会を持たない学生が多数存在する．その場合，自習により習得することが求められる．科目受講者数とイベント参加者数を加算しても，数百名の規模であり，毎年3500名を超す学部初年次生に対し低い割合である.

また，アカデミック・ライティングの教育を担当している報告者らを含む少数の教員が，現時点で多少の業務拡張を行った場合でも，すべての学部初年次生に対するライティング教育を担当することは不可能な状況である.

さらに，教員が指導する際に気軽に使える教材も存在していなかった．市販書籍は多数存在するが，購入を強制することはできず，利用を促すだけであった.

2.4　他大学の状況との比較

ここで，大阪大学での取り組み改善の参考となった他大学の事例のうち，主なものを5例紹介する．ここで挙げる例以外にも，様々なライティング教育の試みが報告されている[5)].

2.4.1　早稲田大学

早稲田大学には，国内有数の規模を誇るライティング

センター[6]が存在する．学部初年次生向けの完全eラーニングのライティング教育科目も開講している．その活動の中心となってなっているのは，アカデミック・ライティング指導法について訓練を受けた大学院生TAである．大人数の対象者に対応するためのマンパワーを確保する有効な事例となっていると考える．

2.4.2　慶応義塾大学

慶応義塾大学の教養研究センターは，問題発見・調査・発信能力を涵養することを目的とした，少人数授業「アカデミック・スキルズ」を2005年度より開講している．その内容を紹介する，各項目10分程度の動画教材を作成し，YouTube上に公開している．さらに，関連する内容の一連の教科書を出版している[7]．アカデミック・ライティング教育を社会へと広めようとしている試みであると考えられる．

2.4.3　熊本大学

熊本大学では，学部初年次学生に向けて，多くの学部が必修指定しているアカデミック・スキル科目「ベーシック」を開設している[8]．８回の科目内容中，アカデミック・ライティングに相当する回数は２回であるが，その補助となる小冊子を作成し配布している．

2.4.4　関西大学

関西大学では，学部初年次学生に向けて，３種のアカデミック・スキル科目を開講している．関西大学も，アカデミック・ライティングの習得の補助となる小冊子を2種類作成し配布している．その小冊子データはWeb上で公開している[9]．

2.4.5　東京海洋大学

東京海洋大学では，海洋科学部の大島弥生教授が中心となり，日本語教育の教員と専門科目の教員がチームを組み，学生たちが協働学習する，ピアサポートによるアカデミック・ライティング教育を行なっている．「日本語表現法」と題する科目は海洋科学部１年生（約300名）全員必修の科目として開講されている．また，その科目のテキスト[10]は市販されている．

3　状況改善のための取り組み

前節で記した状況を少しでも改善するため，報告者らは，東島清大阪大学教育担当理事副学長や江川温前全学教育推進機構長と平成25年度中に協議を行った．

前記した他大学の取り組みと，大阪大学の実情を勘案し，大阪大学において取り組み可能な事項を案出した．担当可能な人員数の問題から，大規模なライティングセンターの設立や学部初年次生全員を対象とする必修科目の開講は困難であると判断した．ライティングセンターについては，センターに来ない学生に指導することは不可能であるともいえる．また少数の科目の受講のみで十分なライティング力が習得できることも期待すべきでないといえる．

このことから，特定のアカデミック・ライティング科目担当教員だけでなく，共通教育を担当する多くの教員がライティング教育の一部を担当し，また学生に課題を課すことで学びの意欲が増加するよう誘導することが重要であると判断した．ライティングサポートを色々な形態で提供しようとする試みは数多く報告されているが，サポートの需要を増やすことを主眼とした取り組みは新しいものであると自負している．

また，人員の制限から，ほとんどのライティングセンターでの対応は，文章の体裁や論理性，形式が妥当かといった，専門的内容に関わらない事項に限られている．これに対して科目担当教員は，学問的内容に踏み込んだ指導や，学問分野ごとに異なる事項も多い，引用や参考文献提示法の習慣を教えることも可能である．教育可能な内容の豊かさで，優っている取り組みであるといえる．

このような検討を踏まえ，平成26年4月以降以下に紹介するような取り組みを進めている．

3.1　改善項目の概要紹介

ライティングセンター未設置・担当教員数不足・必修スキル科目欠如といった問題点に対処するため，共通教育の科目「情報活用基礎」と「基礎セミナー」の担当教員に対し，担当科目中でアカデミック・ライティングに関する指導を行うことを全学教育推進機構長名で要請することとした．

さらに基礎セミナー担当教員に対しては，出来る限り複数回のレポートを課し，提出者にフィードバックするよう要請した．これは，学生がライティング習得の必要性を感じる頻度を上げ，またフィードバックにより学生自身に改善の取り組みの必要性を気づかせる意図がある．

指導のための教材不足・科目担当者のスキル不足を解消するため，報告者らが，学生配布小冊子・教員のためのマニュアル・FDプログラムをセットで提供することとした．これにより，教員が比較的楽に自身の科目にライティング指導の内容を取り入れられるよう工夫した実施体制となった．

さらに報告者(堀)も，アカデミック・ライティング

の基礎セミナーを担当することとし，坂尻と協力し教育方法の改善や教材開発を行うこととした．

3.2　作成小冊子の紹介

報告者らは，アカデミック・ライティングに関する事項を理解するための簡便な小冊子『阪大生のためのアカデミック・ライティング入門』（全32頁）[11] を作成し，2014年4月入学者に対して配布した．

3.2.1　小冊子の構成

冊子は以下の構成となっている．

1. はじめに
2. アカデミック・ライティングとは
3. 学びの成果に誇りを持とう
4. 手順に従い進めよう
5. 調べよう・実験しよう
6. 骨組みを決めよう
7. パラグラフ・ライティングをしよう
8. 形式を整えて提出しよう

である．このほかに，文献目録の作成や文章の形を整えるためのWord2013を使用した文章作成テクニックが紹介されている．巻末の「提出前チェックリスト」は，文章の「内容」について確認すべきこと，引用や表記の「マナー」，「形式」を整えるポイントなどがコンパクトにまとめられており，ライティング関係の参考文献も提示している．

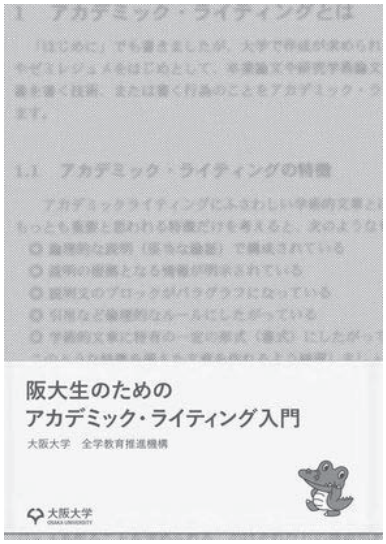

図１　新入生配布ライティング指導小冊子の表紙

3.2.2　小冊子に対する学生と教員からのレスポンス

大阪大学全学教育推進機構では，毎年２回，学部一年生の代表を集めてクラス代表懇談会を実施している．平成26年6月開催の懇談会において，クラス代表者に対し，小冊子に関するアンケートを行った．小冊子の有用性を5段階評価するよう求めた結果，回答数71件中，評価5あるいは4と高い評価とした回答は半数を超える36件であった．自由記述の回答では，「レポートが出たらまず何から始めるべきかわかって良かった.」，「レポート作成に不安があったが，書き方がわかって恐怖心が薄れた.」とのポジティブなコメントと，「配布のタイミングが学部によってまちまちだったので困った.」，「『阪大生のための』というなら，他の似たような冊子にない内容がもっとあるべき」などの改善要求コメントを得ることができた．

また，平成26年度1期終了時に，「情報活用基礎」と「基礎セミナー」担当教員に活用状況や改善点についてのメールアンケートを実施した．「コンパクトに纏まっていて使いやすい.」「チェックリストが有用だ.」とのポジティブなコメントと，「不正についての説明が不十分だ.」「具体例がなく不親切である.」「基礎セミナーは授業の形態も様々なので，このような企画には向いていない.」などの改善点に対するコメントを得ることができた．

また，他大学からも，本小冊子を参考にし，各大学独自のライティング教材冊子を作成したいとの申し出があった．

3.2.3　小冊子の改善計画

前記のレスポンス等の情報を受け，今後の小冊子を次のような点で改善していくことを計画している．

- シンプルな構成案から，具体的な説明ブロックの塊へと発展させる際の手順の説明を加える．
- 本冊子は，研究倫理の向上を主目的としたものではないが，本稿執筆時点での社会からの要請に応えるため，より強調・詳述する．
- 大阪大学内学習サポートなど，学生の学びをフォローする情報の紹介を加える．
- 入学式時点で支給する資料の一つとして新入生に配布し，時期の遅れや方法のばらつきがないようにする．

なお，本冊子のコンパクトなサイズや小ページ数にまとめて容易に読み切れる文章量に抑えている点は，維持する予定であり，大規模な改訂としないことを計画している．

3.3　教員マニュアルの目的と構成

教員用マニュアルには，学生がどのような点で困っているか，どのような内容を紹介すると有効かについて記載した．90分授業1回で基本事項を指導する場合のタイムテーブルや，学生提出物に対する評価法の例なども紹介している．特に以下の事項は各教員が責任を持って説明すべきとした．

◎大学入学までと大学で求められるライティングの質の違い
◎課題に対してどう取り組めばよいかの（簡単でも良いので）指針
◎教員が求める提出物の形式的要件の具体例
◎教員が受け入れられる論証のタイプ
◎引用など倫理的なルールはどの範囲を求めるか
◎提出物評価の具体的方法と基準の説明

3.4　FDプログラムの紹介

大阪大学では，平成25年6月に教育学習支援センター(TLSC)が発足し，さまざまなFDやキャリア支援活動を開始している．報告者らも，平成26年1月より，FDプログラムとして「科目の中でのアカデミックライティング指導法」と題したグループワーク中心の90分プログラムを提供している．平成25年度は1回開催(7名参加)であったが，平成26年度は本稿作成時点までに2回(参加者数計7名)開催している．

参加者からは，「学内の取り組みを知ることができた」，「阪大生に特化して教員ができることが具体的に挙げられて良かった」，「本当は教員全員が受講すべきだと思う」などの意見が出された．

4　おわりに

本稿では，報告者らが実践しているアカデミック・ライティング教育の，最近の特徴的な取り組みについて報告した．平成26年4月以降，特に学部初年次の学生の多くがアカデミック・ライティングについて学ぶ機会が増えるよう，また，多数の教員が担当科目中でアカデミック・ライティング教育ができるよう，小冊子の作成と配布，教員向けマニュアルの作成，アカデミック・ライティング指導を科目に取り入れるためのFDプログラムの実施を行っている．

今後の課題として，学生や教員など利用者からのフィードバックをもとに教材を更新していくこと，さらに自習のためのeラーニング教材を提供することなどがあげられる．

謝辞

本稿で紹介した取り組みは，2010年6月より図書館で開催している「レポートの書き方講座」をはじめとする講習会実践の経験が基になっている．開催に協力してくださっている大阪大学附属図書館の多くの関係者の方々に感謝する．また学生用小冊子の作成と配布，「情報活用基礎」や「基礎セミナー」での実践に際し，全学教育推進機構，サイバーメディアセンター，大阪大学クリエイティブユニットの方々の協力を得た．あわせて，感謝する．

大阪大学国際教育交流センターの村岡貴子教授と村岡氏が代表を務める科学研究費補助金研究グループの共同研究者からは，多数のディスカッションを通じ改善のヒントとなる情報をいただいている．感謝する次第である．

筆者らがライティング教育の知見を深めるにあたって，他大学の多くの事例を参考にさせていただいた．特に早稲田大学ライティングセンターの事例[6]と東京海洋大学でのピア活動中心授業の事例[10]からは大変多くの事を学ぶことができた．早稲田大学の佐渡島紗織教授，東京海洋大学の大島弥生教授には，深く謝意を表したい．

本稿で紹介した取り組みの切っ掛けとなる要請をしてくださり，実現に際して様々な支援を与えてくださった，大阪大学の東島清教育担当理事副学長，江川温前全学教育推進機構長，下田正全学教育推進機構長には特に感謝申し上げる次第である．

本稿で紹介した取り組みは，科学研究費挑戦的萌芽研究(課題番号：25540163, 代表者:堀一成)と基盤研究(B)(課題番号：26284072, 代表者:村岡貴子)の補助を得て推進している研究成果に基づいている．

受付2014.11.25／受理2015.02.07

参考文献

1）堀一成．附属図書館ラーニング・コモンズを利用した教育実践の試み．大阪大学大学教育実践センター紀要, Vol. 7, pp. 81-84, 2010.
2）堀一成．附属図書館ラーニング・コモンズを利用した大阪大学における学修支援の取り組み．図書館雑誌, No. 106, pp. 765-767, 2012.

3） 村岡貴子, 因京子, 仁科喜久子. 論文作成のための文章力向上プログラム. 大阪大学出版会, 2013.
4） 村岡貴子. 専門日本語ライティング教育. 大阪大学出版会, 2014.
5） 関西地区FD 連絡協議会, 京都大学高等教育研究開発推進センター編. 思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント. ミネルヴァ書房, 2013.
6） 佐渡島紗織, 太田裕子. 文章チュータリングの理念と実践. ひつじ書房, 2013.
7） 佐藤望, 湯川武, 横山千晶, 近藤明彦. アカデミック・スキルズ（第２版）－－大学生のための知的技法入門. 慶応義塾大学出版会, 2012.
8） 本間里見, 根本淳子. 初年次教育科目「ベーシック」の開発と運用. 日本教育工学会第28 回全国大会講演論文集, pp. 407-408, 2012.
9） 関西大学ライティングラボ. http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/index.html. 参照：2014 .12 .13.
10）大島弥生, 池田玲子, 大場理恵子, 加納なおみ, 高橋淑郎, 岩田夏穂. ピアで学ぶ大学生の日本語表現 [第2版]. ひつじ書房, 2014.
11）堀一成, 坂尻彰宏. 阪大生のための　アカデミック・ライティング入門. 大阪大学全学教育推進機構, 2014. http://hdl.handle.net/11094/27153.